泊園書院

なにわの学問所・関西大学のもう一つの源流

関西大学泊園記念会

東平野町の泊園書院本院

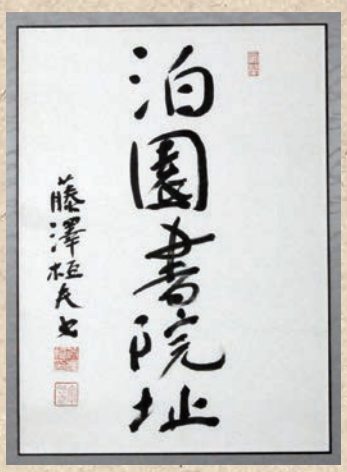
江戸時代後期の文政８年（1825）、大阪に関西大学のルーツの一つとなる漢学塾――泊園書院が生まれました。泊園とは「さっぱりとした静かな心持ちで学問する学び舎」の意味です。当代の碩学といわれた藤澤東畡が開いたこの学問所は、その子の南岳、南岳の子の黄鵠・黄坡、そして石濱純太郎へと受け継がれ、昭和23年（1948）に閉じられるまでの120余年の間に一万人を超える門人が教えを受けたといわれます。

江戸から明治・大正・昭和前期という、日本近世・近代の激動期を歩み続けた漢学塾はまれです。この間、泊園書院は有為な人材を数多く輩出し、大阪文化のみならず日本の近代化の発展に大きく寄与しました。

戦後、泊園書院の蔵書や自筆稿本、印章などのコレクションは関西大学に「泊園文庫」として寄贈され、その人文学やアジア学発展の礎となりました。「泊園記念会」も関西大学東西学術研究所内に置かれて毎年記念講座が開かれています。

なにわに生まれた私塾泊園書院――関西大学はその志を今に受け継いでいます。

泊園書院のホームページ
http://www.db 1 .csac.kansai-u.ac.jp/hakuen/



藤澤桓夫書「泊園書院址」

＊表紙の写真は竹屋町の泊園書院分院（のち本院）、および関西大学泊園文庫のラベル
裏表紙の「泊園」は新聞『泊園』所載の黄坡題字

泊園書院の歩み——江戸・明治・大正・昭和

泊園書院は「三世四代」といわれる４代の院主および石濱純太郎によって維持、発展した。彼らの事蹟を中心にその歩みをたどる。

藤澤東畡（1794-1864）

泊園書院の初代院主、藤澤東畡は四国讃岐の高松藩香川郡安原村（現：高松市塩江町安原下中村地区）の農家に生まれた。名は甫、通称は昌蔵あるいは健蔵、字は元発。東畡および泊園はその号である。幼い頃から地元の儒者中山城山に師事して荻生徂徠の古文辞学を修め、非凡な才能を示した。23歳で長崎に留学して「唐音」（中国語）を学び研鑽を積む。そして文政８年（1825）、31歳の時、大阪に出て淡路町御霊筋西（現：淡路町５丁目）に「泊園塾」（のちの泊園書院）を開いた。

東畡は大阪を代表する学者・教育者として活躍し、高松藩から士分にとりたてられるとともに、豊岡藩主の京極高厚、尼崎藩主の松平頼胤の賓師として学問を講じ、大阪城代により「御城入儒者」にも選ばれる。民間学問所である平野の含翠堂にも毎年出講した。詩文や書のほか琴の演奏にも巧みな教養豊かな文人でもあった。幕末には勤皇の志士の慕うところとなり、泊園は大阪最大の私塾として栄えた。受講の門人は三千余名にのぼるといわれる。

公刊された著作に『泊園家言』、『東畡先生文集』、『東畡先生詩存』などがあり、『弁非物』その他、多くの手稿本も伝わる。

藤澤南岳（1842-1920）

泊園書院第二代院主。東畡の長子。天保13年（1842）生まれ。名は恒、通称は恒太郎、字は君成。号は南岳のほか七香斎、香翁、醒狂子など。慶応元年（1865）、24歳で家督を継いで高松藩の士分に列せられるとともに書院を主宰する。慶応４年（1868）、高松に戻り、藩の方針を佐幕から勤皇へと劇的に転換させて藩滅亡の危機を救う。その功により藩主の松平頼聡から南岳の号を賜わった。その後、明治新政府の出仕要請を断り、明治６年（1873）、32歳の時、泊園書院を大阪船場に再興する。のち、淡路町１丁目に書院を移す。

南岳は当代随一の学匠として名声高く、全国から学生が集まり、書院の黄金期を作った。学んだ門人は五千人を超えるとされ、関西を代表する文化人として活躍した。逍遥遊社における漢詩文の集いや、孔子を祭る釈奠も始めている。公刊された主な著作だけでも『自警蒙求』、『校訂史記評林』、『修身新語』、『評釈韓非子全書』、『論語彙纂』、『万国通議』、『七香斎文雋』、『七香斎詩抄』などがあり、明治・大正期の学者として圧倒的な質量をほこっている。未公刊の自筆稿本や日記も膨大な量にのぼる。

藤澤黄鵠（1874-1924）

泊園書院第三代院主。南岳の長子。明治７年（1874）生まれ。名は元造、字は士亨。号はもと西里。幼少時から父南岳の薫陶を受け、16歳で東京に出て名門の共立学校に学ぶ。その後、清国南京に２年間留学して中国語を学ぶなど見聞を広めた。帰国して南岳引退後の書院経営を引き継ぎ、明治41年（1908）、35歳のとき衆議院議員に当選する。同44年（1911）、南北朝における皇室の正統に関する「南北朝正閏問題」をめぐって桂太郎内閣に質問状を出して世論を沸騰させ、議員を辞職した。その事件のことは石川啄木の短歌や日記にも共感をもって詠まれている。

のち大阪にもどり、自宅で子弟の教育を行うかたわら南岳の著作を整理し、また大阪府立高等医学校（のちの大阪大学医学部）嘱託教授の任についた。編著に『亡友詩存』、『菁莪余録』、『洗醒余録』、『我が観たる孔子』などがある。漢詩においてもすぐれた才能を示した。

藤澤黄坡（1876-1948）

泊園書院第四代院主。南岳の次子。明治９年（1876）生まれ。名は章次郎、字は士明。号はもと西坡。岡山の閑谷学校で学んだあと、20歳で東京高等師範学校・国語漢文専修科の第１期生となる。卒業後、大阪にもどって岸和田中学教諭として国漢学を講じ、明治44年（1911）年、36歳のとき南区竹屋町９番地（現：中央区島之内１丁目）の泊園書院分院を主宰する。のち南岳が亡くなり黄鵠が引退した後はここが書院の本院となった。そして義弟の石濱純太郎と協力しつつ大正・昭和時代の書院を維持した。

黄坡は関西大学に長くつとめた。大正９年（1920）、関西大学が大学令により大学（旧制）として認可されると、その予科講師となる。のち専門部文学科講師、同教授。戦後の昭和23年（1948）、関西大学最初の名誉教授となった。漢詩文に巧みで、碑文や顕彰碑を多く撰している。詩吟にも熱心で、関西大学吟詩部は黄坡がつくった。

公刊された著作に『論語彙纂通解』、『中庸家説』など、漢詩集に『三惜書屋初稿』、『三惜書屋詩稿』がある。小説家として活躍した藤澤桓夫はその長子である（後述）。

石濱純太郎（1888-1968）

大阪淡路町の製薬会社・丸石商会の長男として生まれる。字は士精、号は大壺。黄坡の義弟。10歳で泊園書院に入り、南岳に学ぶ。東京帝国大学文科大学支那文学科を卒業後、大阪にもどり黄坡とともに書院の維持、発展につくした。また内藤湖南に師事し、京都学派の実証的学問を継承して業績をあげる。とりわけ語学に天才的な才能を示し、中、英、独語はもちろん、モンゴル語や満洲語、サンスクリットを理解した。ロシアのニコライ・ネフスキーとともに西夏語研究の先駆者となったことは有名である。大阪文化の研究にも貢献している。

石濱と関西大学との関係は大正15年（1926）、石濱が専門部講師になったことに始まる。のち法文学部文学科講師。戦後の昭和24年（1949）年には関西大学文学部史学科教授となり、泊園文庫の寄贈、東西学術研究所の創設、文学部東洋文学科（現在の中国学専修）の開設などに尽力した。関西大学最初の文学博士号取得者でもある。

主な著作に『支那学論攷』、『東洋学の話』、『富永仲基』、『浪華儒林伝』など。その四万二千余冊にのぼる蔵書は「石濱文庫」として大阪外国語大学（現：大阪大学）に寄贈された。

泊園文庫蔵書印１
「泊園文庫」

泊園文庫蔵書印２
「泊園藤澤氏蔵書之記」

泊園文庫蔵書印３
「泊園蔵書之記」

関西大学総合図書館
泊園文庫書架

泊園文庫

泊園書院の建物は戦災で焼失するが、その蔵書や収蔵品は幸いに戦禍を免れ、昭和26年（1951）３月、黄坡の子の藤澤桓夫から関西大学図書館に「泊園文庫」として一括寄贈された。

この泊園文庫の寄贈をきっかけとして関西大学内に東西学術研究所が設けられ、文学部に東洋文学科が開設される。これは当時、本学の理事長だった宮島綱男、文学部教授だった石濱純太郎の努力による。

泊園文庫は一万六千点近くにのぼる書籍を中心に、東畯・南岳・黄鵠・黄坡および石濱らの自筆稿本類約九百二十余点、さらに印章百七十余顆、多数の書画を含んでいる。彼ら自身の書入れ本も多い。まさに漢籍の宝庫であり、近世大阪文化の一大コレクションといえよう。

■泊園文庫の内訳

図書　16,885冊（うち書籍15,957点
　　自筆稿本類928点）
書軸　16点27軸
書簡など　627通
印章　178顆
合計　17,717点

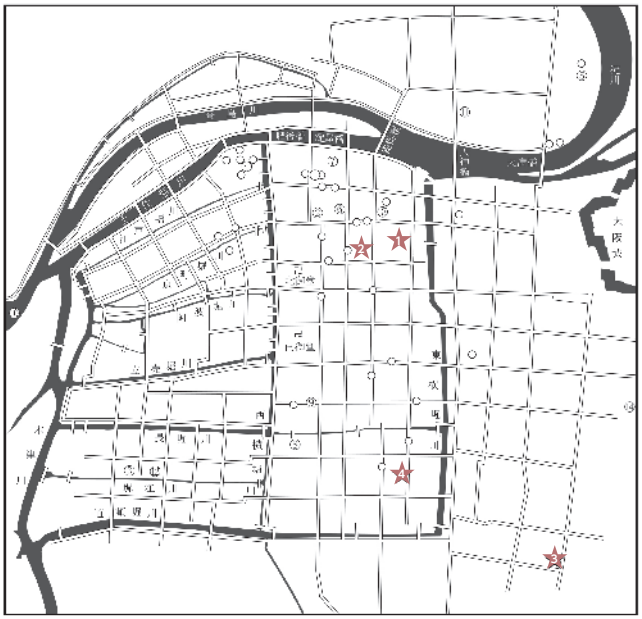
大阪の学問所と泊園書院

江戸時代、大阪には私塾や心学講舎、寺子屋など多くの学問所が作られた。教育史家の乙武岩造は、

> 実に天保から弘化にかけて、大阪市内寺子屋の隆盛は殆ど全国に比類なく大江戸のそれをも凌駕したほどである。（『日本庶民教育史』下巻、314頁）

といっている。一般に大阪は商人の町で学問には熱心でなかったといわれることがあるが、そのような見方は正しくなく、むしろ大阪は教育に熱心な土地柄であった。

懐徳堂（三宅石庵、中井甃庵・竹山・履軒ら）や混沌社（片山北海）、木村蒹葭堂、梅花社（篠崎三島・小竹）、洗心洞（大塩平八郎）、広瀬旭荘（きょくそう）塾、適塾（緒方洪庵）などは全国にも知られた塾であり、泊園書院の隆盛もそのような大阪文化の文脈の中で理解すべきである。



（梅渓昇編『大阪府の教育史』付図「大坂市中における私塾・寺子屋・心学講舎の分布」をもとに作成した）

大阪学問所マップ

江戸時代後期から幕末にかけての学問所（私塾と心学講舎）を○で示した。泊園書院のみは江戸後期・大正・昭和にかけて存在していた主な場所を１～４で示した。

①懐徳堂	⑥広瀬旭荘塾	⑪恭寛舎
②混沌社（孤雲楼）	⑦適塾	⑫協恭舎
③木村蒹葭堂	⑧明誠舎	⑬信成舎
④梅花社	⑨静安舎	⑭敦厚舎
⑤洗心洞	⑩倚衡舎	

（⑧～⑭は心学七舎）

泊園書院は何度か場所を変えている。1は淡路町（江戸後期および明治前期）、2は瓦町（幕末期）、3は東平野町（明治末期）、4は竹屋町（明治末～昭和前期）に、書院がそれぞれあった場所。

泊園書院の碑

南岳は明治９年（1876）、東畯創業の昔を偲び、書院を淡路町１丁目に移した。この頃、入門者が激増し書院は最盛期を迎える。当時の遺構は残っていないが、大阪市教育員会により書院ゆかりの淡路町に「泊園書院跡」の碑が建てられている。

また、黄坡が主宰した南区竹屋町９番地（現：中央区島之内１丁目）の泊園書院分院は黄坡の自宅を兼ね、大正９年（1920）以後、本院となった。建物は戦災で焼失したが、戦後、黄坡の子の藤澤桓夫により、その跡地に記念碑が建てられた。中央に「泊園書院址 藤澤桓夫識」と刻まれる。平成22年（2010）10月23日、関西大学の以文館北側に移置され、泊園の伝統を今に伝えている。

「泊園書院跡」の碑
（中央区淡路町１丁目）

「泊園書院址」の碑
（関西大学以文館北側）

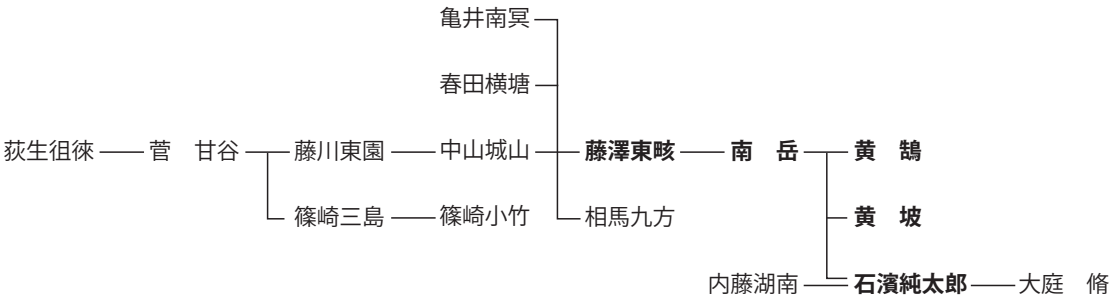
泊園書院の学統

泊園書院と徂徠学

泊園書院は荻生徂徠（1666-1728）の古文辞学を継承する。古文辞学とは中国古代の言語（古文辞）と制度文物の研究によって古典籍に記された正しい道を究明しようとする学問である。そのため、儒教の経典のみならず、歴史書や諸子などの文献も幅広く学んだ。また「文は漢唐、詩は盛唐」のスローガンをかかげ、高い品格の詩文制作を尊んだ。菅甘谷（1691-1764）は、こうした徂徠学を大阪に最も早く伝えた人物であった。

東畩や南岳はこれを受け継ぎ、実証的で厳密な学問研究を行うとともに、詩文や琴棋書画など芸術の世界に遊ぶ文雅な生き方を享受している。ここには一部の儒学者にありがちな謹厳辛辣さとは違う、のびやかで自由な学風がある。

また、京都中国学のリーダー内藤湖南に師事した石濱純太郎は泊園書院に近代的東洋学を導入し、泊園学に新たな展開をもたらした。



東畩の師、中山城山たち

東畩の師の中山城山（1763-1837）は高松藩香川郡横堰村（現：高松市香南町横井）の人で、医師中山玄柳の子。藤川東園に医学と儒学を学び、家塾を開いて徂徠の古文辞学を教えた。大阪の春田横塘と親しく、その縁により横塘は東畩の大阪開塾を援助してくれた。

城山の師は藤川東園（1741-1807）で、高松藩の人。父に従って大阪で菅甘谷に師事したのち、故郷にもどって徂徠の古文辞学を讃岐に伝え、城山らを育てたのである。

なお、藤川東園の孫の藤川三渓（1817-1889）は幕末維新期における日本の水産業・捕鯨事業の先駆者で、現在、高松市三谷町の藤川家墓地に泊園門人の牧野謙次郎による顕彰碑がある。平成27年（2015）11月にはその功績をたたえ、傍らに三渓の胸像が建てられた。

中山城山像
（高松市香南歴史民俗郷土館蔵）

泊園出身の門人たち

泊園書院の門人は政界・官界・実業界・教育界・ジャーナリズム・学術・文芸などさまざまな分野で活躍し、魅力的な人物にいろどられている。ここでは主な人物を紹介する。

高島秋帆	（たかしま・しゅうはん 1798－1866）	砲術家、高島流砲術の創始者
揚小四郎	（あげ・こしろう 1808－1862）	高松の豪農、東畩の援助者
中谷雲漢	（なかたに・うんかん 1812－1875）	漢学者、尼崎藩儒
片山冲堂	（かたやま・ちゅうどう 1816－1888）	漢学者、高松藩儒
田谷ハル	（たや・はる 1820－？）	大阪の寺子屋の名師匠
雨森精斎	（あめのもり・せいさい 1822－1882）	漢学者、松江藩校教授
天羽生岐城	（あもう・きじょう 1825－1894）	漢学者、教部省訓導
郷　純造	（ごう・じゅんぞう 1825－1910）	幕末の志士、初代大蔵次官
妻鹿友樵	（めが・ゆうしょう 1826－1896）	医師・文人、私塾「心遠舎」を開く
華岡積軒	（はなおか・せきけん 1827－1872）	医師、華岡青洲の弟の鹿城の子
華岡青洋	（はなおか・せいよう 1828－1869）	医師、華岡南洋（青洲の女婿）の子
京極高厚	（きょうごく・たかあつ 1829－1905）	但馬豊岡藩主、貴族院議員
岸田吟香	（きしだ・ぎんこう 1833－1905）	ジャーナリスト、実業家
安達清風	（あだち・せいふう 1835－1884）	幕末の志士、北海道開拓使
日比野輝寛	（ひびの・てるひろ 1838－1912）	漢学者、名古屋藩校教授
藤本煙津	（ふじもと・えんしん 1838－1926）	画家、篆刻家
日柳三舟	（くさなぎ・さんしゅう 1839－1903）	教育者、大阪師範学校長
岡本韋庵	（おかもと・いあん 1839－1904）	探検家、教育者、斯文会初代書記
伊藤忠兵衛	（いとう・ちゅうべえ 1842－1903）	伊藤忠商事・丸紅創業者
西　薇山	（にし・びざん 1843－1904）	教育者、岡山県閑谷学校長
陸奥宗光	（むつ・むねみつ 1844－1897）	政治家、駐米公使、外務大臣
坂田諸潔	（さかた・もろきよ 1845－1877）	幕末・明治初期の志士
津田　貞	（つだ・てい 1845－1882）	「朝日新聞」初代編集長
春木義彰	（はるき・よしあき 1846－1904）	検事総長、貴族院勅選議員
松岡康毅	（まつおか・やすたけ 1846－1923）	政治家・教育者、日本大学初代学長
松平忠興	（まつだいら・ただおき 1848－1895）	尼崎藩主、日本赤十字社設立者
滝山　瑄	（たきやま・せん 1851－1931）	実業家、愛珠幼稚園開設者
豊田宇左衛門	（とよだ・うざえもん 1852－1926）	金融業者、修斉小学校創設者
豊田文三郎	（とよだ・ぶんざぶろう 1853－1896）	衆議院議員、大阪電灯会社設立者
大城戸宗重	（おおきど・むねしげ 1855－1921）	官僚、朝鮮総督秘書官
黒本稼堂	（くろもと・かどう 1858－1936）	漢学者、五高教授
小西勝一	（こにし・かついち 1858－1940）	朝日新聞社専務取締役
山田喜之助	（やまだ・きのすけ 1859－1913）	大審院判事，東京弁護士会長
指原安三	（さしはら・やすぞう 1860－1903）	ジャーナリスト、教育者

高島秋帆

郷　純造

岸田吟香

岡本韋庵

伊藤忠兵衛

陸奥宗光

松岡康毅

井上善次郎	（いのうえ・ぜんじろう 1862－1941）	医師、内科の権威、「仁丹」開発者
永田仁助	（ながた・にすけ 1863－1927）	大阪銀行頭取、貴族院議員
牧野謙次郎	（まきの・けんじろう 1863－1937）	漢学者、早稲田大学教授
本多政以	（ほんだ・まさざね 1864－1921）	石川県農工銀行頭取、金沢実業会会長
岡田松窓	（おかだ・しょうそう 1864－1927）	大阪の豪農、実業家
鴨居　武	（かもい・たけし 1864－1960）	東京帝大教授、日本化学会初代会長
川合孝太郎	（かわい・こうたろう 1865－1940）	漢学者、早稲田大学講師
島田鈞一	（しまだ・きんいち 1866－1937）	漢学者、東京文理大学教授
福本元之助	（ふくもと・もとのすけ 1866－1937）	尼崎紡績（現：ユニチカ）社長
越智宣哲	（おち・せんてつ 1867－1941）	正気書院（現：白藤学園）創設者
岡島伊八	（おかじま・いはち 1869－1932）	社会事業家、盲人保護協会会長
森下　博	（もりした・ひろし 1869－1943）	実業家、森下「仁丹」創業者
俵　孫一	（たわら・まごいち 1869－1944）	三重県知事、商工大臣
植野徳太郎	（うえの・とくたろう 1869－1950）	軍人、陸軍中将
下岡忠治	（しもおか・ちゅうじ 1870－1925）	衆議院議員、朝鮮総督府政務総監
幣原　坦	（しではら・たいら 1870－1953）	東洋史家、台北帝国大学初代総長
武田長兵衛	（たけだ・ちょうべえ 1870－1959）	実業家、武田薬品創業者
水落露石	（みずおち・ろせき 1872－1919）	俳人、関西俳壇の先覚者
篠田栗夫	（しのだ・くりお 1872－1936）	漢学者、関西法律学校・関西大学講師
松本　洪	（まつもと・こう 1876－1965）	漢学者、早稲田大学教授
広岡亀子	（ひろおか・かめこ 1876－1973）	大同生命第２代社長広岡恵三の妻
三崎驎之助	（みさき・りんのすけ 1878－1935）	南岳三男、軍医、陸軍一等軍医正
中村彌三郎	（なかむら・やざぶろう 1883－1931）	能楽師、ワキ方
尾崎邦蔵	（おざき・くにぞう 1884－1949）	尾崎商店（現：カンコー学生服）創業者
山下是臣	（やました・これおみ 1891－1986）	書家、書道史研究家
羽間平三郎	（はざま・へいざぶろう 1895－1972）	羽間文庫の創設者
田中塊堂	（たなか・かいどう 1896－1976）	書家、日本書芸院理事長
植野武雄	（うえの・たけお 1897－1949）	東洋史家、満鉄奉天図書館書目係主任
水田硯山	（みずた・けんざん 1902－1988）	画家、日本南画院理事
川崎直一	（かわさき・なおかず 1902－1991）	エスペラント学者、大阪外国語大学教授
多田貞一	（ただ・ていいち 1905－？）	中国史家、『北京地名誌』の著者
三原研田	（みはら・けんでん 1915－1996）	書家、書道史研究家、滋賀大学教授

山田喜之助

永田仁助

牧野謙次郎

鴨居　武

福本元之助

俵　孫一

幣原　坦

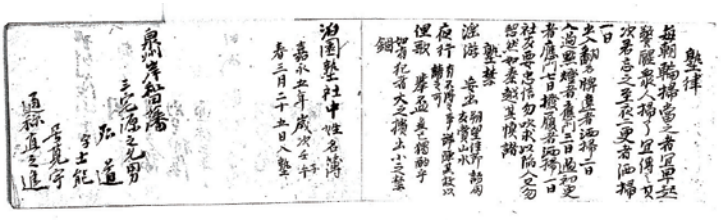
武田長兵衛

このほか、岩波文庫『論語』の訳注などで知られる東北大学教授の金谷治（かなやおさむ）（1920－2006）は関西大学専門部国語漢文専攻科で黄坡と石濱の教えを受け、石濱の勧めにより東北大学に進学している。また関西大学学長・学校法人関西大学理事長を長くつとめた大西昭男（1926－2005）、関西大学第一中学校・第一高等学校校長の長谷川雅樹（1919－ ）もまた、同じ専門部国語漢文専攻科の出身である。いずれも泊園の学統に連なる人物といえる。

塾律・塾禁など

幕末、嘉永５年（1852）の塾律・塾禁・塾生名簿が九州大学附属図書館吉村文庫に残されている。

ここに記された塾律と塾禁は、その後『泊園塾則』などに示された泊園の学則のもとになった。



泊園門人の分布――大阪最大規模・最高レベルの学問所として

『泊園書生姓名録』によれば、天保14年（1843）から安政６年（1859）までの入塾生は288名を数える。通学生を除いた寄宿生のみの数字と思われる。東畩の出身地讃岐（香川県）が最も多く、書院の所在地摂津（大阪府）がそれにつぐ。出身は農商工の平民、武士、医師、僧・神官などさまざまな階層にわたっている。

明治37年（1904）に編纂された『登門録』には1656名の門人を載せる。北は北海道から南は鹿児島県までほぼ全国に分布し、最多は大阪市の428名である。しかし、住所不明のため掲載できなかった者も多く、明治６年の再興後の門人は約5000人にのぼるという。驚くべき数である。

明治10年代の最盛期には、寄宿生と通学生を含めて一度に三百数十名という学生が在籍し学んでいた。今でいえば大学の１学部にも相当する数である。この頃、泊園書院は名実ともに大阪最大規模・最高レベルの学校であった。

院主たちの活躍

「泊園書院」の由来

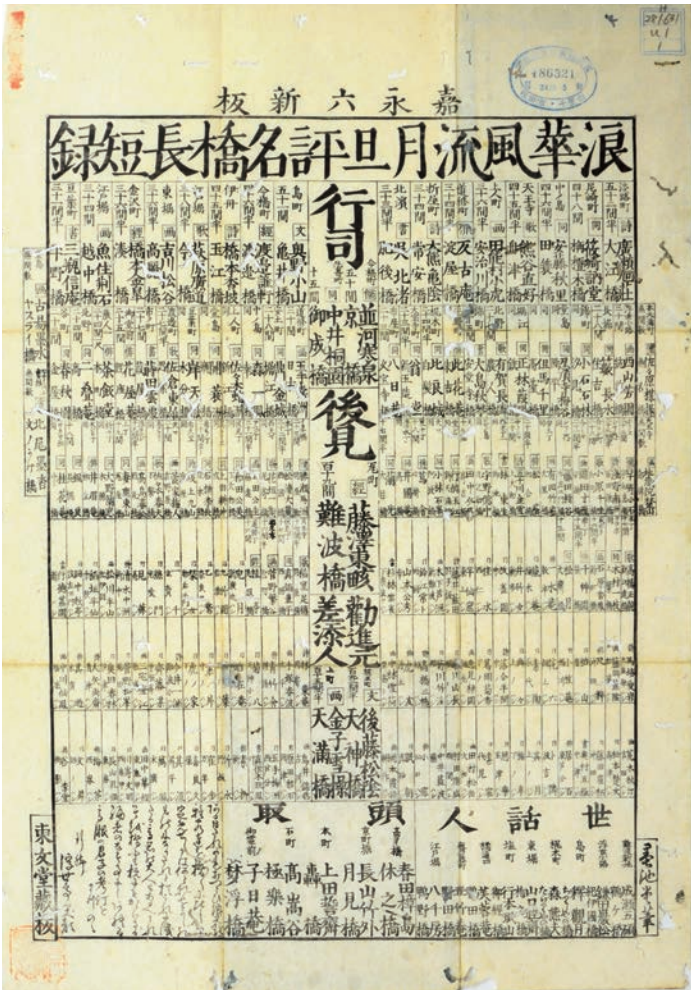
「泊園」とは「さっぱりとした静かな心持ちで学問する学び舎」の意。書院は私塾のことである。

この名は、長崎遊学から帰った東畡が高松福田町に開いた塾「守泊庵（しゅはくあん）」に由来する。命名したのは師の中山城山。「守泊庵」は東畡の別号ともなり、「守泊簷（えん）」と書かれることもある（庵と簷は同義）。

「泊」とは物事に拘泥しない、さっぱりとした状態、静かで恬淡（てんたん）たる心持ちをいい、「守泊」は、そうした心境を守ることをいう。才気煥発な東畡は師の城山から「性褊急而善怒」（性格がせっかちで怒りっぽい）と評されたことがある。城山は若き東畡を戒め、心静かに学問すべきことを諭して「守泊庵」と命名したのであろう。この「泊」を用いて「泊園」としたのである。ちなみに、石濱純太郎は「泊園」の意味するところを「ゼイタクせんと、身も心も淡泊に暮らせということや」と語っている（『泊園』第50号）。

なお、東畡時代は「泊園塾」と呼ばれ、「泊園書院」の名が正式名称になったのは明治11年（1878）以降と思われる。

泊園書院の正面玄関



浪華風流月旦評名橋長短録

東畡の名声

東畡の名声はさまざまな資料から知ることができる。ここに掲げたのは嘉永６年（1853）版の評判記「浪華風流月旦評名橋長短録」で、幕末期の文人墨客を大阪の八百八橋に見立てた番付の一枚刷物。ここで東畡は中央に「後見」として大書され、百十九間もある難波橋に見立てられている。一方、広瀬旭荘は大江橋で五十二間半、奥野小山は亀井橋で五十一間。また懐徳堂の並河寒泉と中井桐園は行司役、後藤松陰は勧進元。

東畡は並みいる儒者たちを従え、大阪第一の学者と見なされているのである。

懐徳堂と泊園書院――浪華徒弟の盛んなるは、東畩を推す

東畩は大阪屈指の学者として衆目の一致するところであった。幕末の懐徳堂につき記した中井木菟麻呂は、懐徳堂と泊園を比べて、

> 寒泉時代ノ懐徳堂ニテハ、経書ノ講義ハ朱註一方ノ単純ナル解釈ニ過ギズ、輪講其他書生方ノ研究ニモ、諸家ヲ交へ挙ゲテ、議論ヲ闘ハスコトヲ許サレズ、謹慎黙従シテ、教ヲ承クルヲ常トセリ、故ニ游学ノ書生、其教養ニ満足セズ、競ヒテ藤澤東畩ノ門ニ集マル形勢ト為リタリ（『懐徳堂水哉館先哲遺事』）。

といっている。経書の講義の際、朱子の注釈を単純に解説するだけで自由な議論を許さなかった懐徳堂（学主は並河寒泉）の学風に反発し、当時の書生たちはこぞって東畩の門下に集まったという。

幕末に東畩を訪ねた岡鹿門も「浪華徒弟の盛んなるは、東畩を推す」（『在臆話記』）と、その塾生の多さを特筆している。

晩期懐徳堂の衰頽を受けて、大阪の学術を維持しこれを振興したのが泊園書院であった。

懐徳堂は明治２年（1869）に閉校となるが、その後、大正年間になると、懐徳堂記念会や重建懐徳堂の設立・運営を南岳や石濱は積極的に支援している。

「懐徳堂」幅
（大阪大学懐徳堂文庫蔵）

藤澤東畩頌徳碑

「藤澤東畩頌徳碑」拓本
（高松市塩江美術館蔵）

藤澤東畩頌徳碑

明治35年（1902）４月、高松安原の東畩の生誕地近くに建てられた顕彰碑。地元の有志によりつくられた。文章は南岳が書き、それを友人の書家大村屯が記した。東畩の学徳を格調高い漢文でたたえる。上の「頌徳」の篆額は高松藩最後の藩主で当時伯爵だった松平頼聡の揮毫になる。頼聡は南岳に号を賜わった藩主その人である。また、手前の「藤澤東畩頌徳之碑」の標石は昭和38年（1963）、東畩の没後百年を記念し、曾孫にあたる藤澤桓夫により立てられたものである。

この碑は平成28年（2016）８月、関西大学創立130周年記念事業の一環として、旧安原小学校内に移設された。拓本は高松市塩江美術館蔵。

通天閣などの名づけ親、南岳

南岳は学問、度量、人格、見識いずれをとっても当代随一の巨匠であり、名実ともに関西文化の顔であった。南岳が通天閣や愛珠幼稚園、仁丹、小豆島の名勝寒霞渓の命名者となったのは、その人望がいかに厚かったかを物語っている。

通天閣は明治45年（1912）７月、パリのエッフェル塔と凱旋門を模して大阪新世界の娯楽遊園地「ルナパーク」内に建設された。太平洋戦争中、塔は解体されたが、昭和31年（1956）、現在の塔が再建され、大阪を象徴する展望塔として親しまれている。

大阪の愛珠幼稚園は明治13年（1880）、東区北浜（現：中央区北浜）に滝山瑄、豊田文三郎らによって開設されたわが国初の町立幼稚園である。「愛珠」の名は唐の詩人白居易（白楽天）の詩に由来するもので、手のひらの中で珠を愛でるように幼な児をいつくしむという意味。その木造平屋建ての建物は国の重要文化財に指定されている。

仁丹は大阪淡路町に薬種商「森下南陽堂」を経営していた森下博が明治38年（1905）に発売した常備薬である。仁丹の名は南岳および西村天囚の命名による。「仁義礼智信」という儒教最高の徳である「仁」が中国への輸出を考えていた森下の方針にも合致したのである。

なお、仁丹の開発に寄与した井上善次郎はジストマ研究により医学博士となった内科の権威で、泊園門人でもあった。

寒霞渓は高松沖の小豆島にある名勝で、長い年月によって奇岩怪石の絶景が作り出されている。もと「浣花渓」と称したが、明治11年（1878）、南岳によってこの名が定められた。日本三大渓谷美のひとつと称され、国指定名勝として多くの観光客に親しまれている。

初代通天閣
（Wikipediaによる）

現在の通天閣
（Wikipediaによる）

愛珠幼稚園
（Wikipediaによる）

仁丹の大礼服マーク
（森下仁丹HPによる）

寒霞渓
（Wikipediaによる）

帝国大学教授就任を固辞

帝国大学教授就任の要請を断わったのも南岳の生き方を示すエピソードである。

明治26年（1893）10月、52歳の南岳は友人の島田篁村（1838-1898）から帝国大学（のちの東京帝国大学）教授への就任要請を受けた。このとき講座制を採用した帝国大学では、文科大学漢学科の第一講座の初代主任教授を篁村がつとめることになり、第二講座主任教授を南岳に求めたのである。

しかし南岳は、政府の教育方針との違いからこれを固辞した。南岳は民間の学者として才能を発揮する道を選んだのである。代わって第二講座の初代主任教授になったのは竹添進一郎であった。

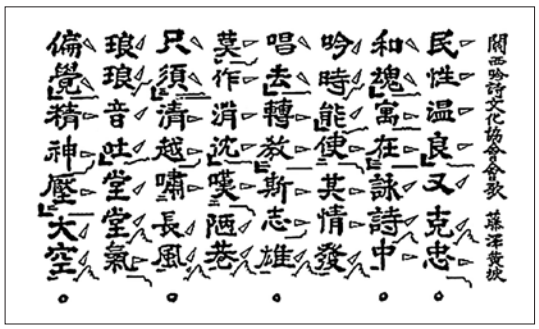
黄鵠の衆議院議員辞職と石川啄木

明治44年（1911）２月、衆議院議員の黄鵠は日本の南北朝の正統問題（いわゆる正閏問題）に関する質問書を衆議院に提出した。

黄鵠はついで小松原英太郎文部大臣、桂太郎首相と会見したあと衆議院本会議において演説し、衆議院議員を辞職する。皇室の正統性にかかわる問題として桂内閣を窮地に立たせるとともに、世論を沸騰させる事件であった。このニュースを知って驚いた石川啄木は黄鵠に同情して、

　藤澤といふ代議士を　弟のごとく思ひて　泣いてやりしかな

と詠んでいる（『悲しき玩具』）。



黄坡作「関西吟詩文化協会会歌」
（社団法人関西吟詩文化協会 HP による）

黄坡と詩吟

黄坡は詩吟を推奨した。昭和９年（1934）年、黄坡は詩吟の会「関西吟詩同好会」を作ってその会長となり、「会歌」を作っている。当会は昭和48年（1973）、文化庁の認可を受けて社団法人「関西吟詩文化協会」となり、現在に至っている。

また同じ昭和初期、黄坡の指導により関西大学に吟詩部が創られ、現在、早稲田大学稲吟会、明治大学詩吟研究部などと並ぶ伝統あるサークルとなっている。

石濱純太郎と泊園書院学会の設立

大正９年（1920）５月、33歳の石濱は黄坡の支援を得て書院内に泊園書院学会を設立する。この学会は「東亜学芸」の研究を目的とし、伝統漢学を近代的東洋学へと脱皮させようとする学術団体で、京都大学を中心とする「支那学社」の『支那学』創刊より数か月早い。

学会は例会を開くとともに『泊園書院学会々報』を刊行して成果を発信した。学会は大正13年（1924）７月、石濱の外遊とともに中止のやむなきに至るが、この試みは東洋学におけるその後の石濱の活躍へとつながり、南岳亡きあとの泊園書院に新たな歴史を作っていく。

『泊園書院学会々報』第１冊

新聞『泊園』の発行

昭和２年（1927）12月、石濱は黄坡の協力のもと新聞『泊園』を創刊した。以後、おおむね毎月１回、毎号４ページで刊行し、書院の活動状況や同窓生の動向、道徳・学術の文章や漢詩文などを載せて漢学の普及をはかった。戦火が激しさを増す昭和18年（1943）９月まで合計78号を出し、石濱と黄坡はたゆまぬ健筆をふるった。

新聞『泊園』第１号

藤澤桓夫（1904-1989）

小説家。黄坡の長男。旧制大阪高校在学中、同人誌に発表した小説「首」が横光利一や川端康成に激賞され、新感覚派の若手として登場。黄坡は小説に反対だったが、石濱純太郎が支援してくれた。東京帝国大学英文科に進んでからは新人会で活躍しプロレタリア文学『傷だらけの歌』を書く。のち大阪にもどり、『花粉』『新雪』などの評判作を書き、関西文壇の中心として健筆をふるった。映画化された小説も多い。織田作之助、田辺聖子、司馬遼太郎らはみな桓夫の薫陶を受けている。関西大学に泊園文庫が一括寄贈されたのは桓夫の決断による。

ちなみに、『新雪』に登場する言語学者は石濱純太郎がモデル。石濱は桓夫の叔父にあたる。小説はその娘や弟子、教師、女医たちのさわやかな恋愛物語で、司馬遼太郎が大阪外国語学校（現：大阪大学）のモンゴル語科を志望した主な理由はこの小説を読んだからだという（司馬「弔辞――藤澤桓夫先生を悼む」）。

平成27年（2015）３月、没後25年、生誕110年を記念し住吉区上住吉の旧居跡地に「藤澤桓夫邸「西華山房」跡」の顕彰碑が建てられた。

藤澤桓夫

「西華山房」
（藤澤桓夫印）

西華山房跡の顕彰碑

泊園の学問と芸術

「東讃之民」
（東畩印　阿部縑洲作）

「養真斎主書印」
（円山大迂作）

印章

関西大学には東畩や南岳、黄鵠らの印章が多く伝わっている。とりわけ南岳が所持していた印章はいずれも韻致秀逸なもので、質・量とも日本近代における代表的コレクションとなっている。

「醒狂子」
（南岳印　羽倉可亭作）

「南岳」
（中村石農作）

「七香斎」

「黄鵠」
（河西笛洲作）

著書と自筆稿本

四人の院主と石濱は学者として多くの著作を残し、中国古典学や東洋学研究、漢詩文などの分野で貢献した。泊園文庫には書物の欄外に小字のメモを墨筆で記した書き入れ本や、未刊の自筆稿本も数多く保存されており、貴重である。

『東畩先生文集』10 巻 8 冊　刊本

『古文孝経』刊本
（東畩書入れ本）

『七香斎文鳥』1 巻　刊本
（南岳の文集）

『評釈韓非子全書』20 巻 10 冊　刊本

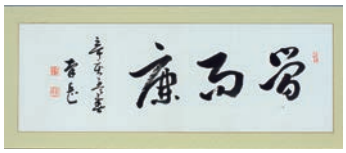
『黄鵠詩稿集』1 冊　自筆稿本
（黄鵠 13 歳の時の漢詩集）

『三惜書屋初稿』1 冊　刊本
（黄坡の漢詩集）

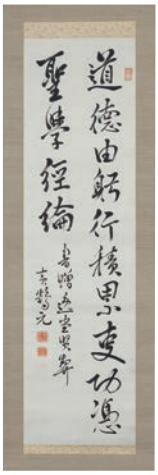
書

院主たちは書家としても有名であり、書軸や扁額を数多く残している。東洋の文人のたしなみとして書の芸術に深い造詣をもつこと、それも泊園書院の特色であった。彼らの書は詩文の高雅さといい、秀逸たる筆致といい、すぐれた芸術作品としてこれを珍重するファンが多い。

東畩「陶靖節」
（七言絶句）



南岳「簡而廉」
（『書経』皋陶謨篇の語）



黄鵠「道徳由躬行積累、事功憑聖学経綸」
（道徳は躬行の積累に由り、
事功は聖学の経綸に憑る）

黄坡「一寸赤心惟報国」
（南宋・陸游の詩句）

関連の史跡

道明寺天満宮の孔子の祭り――釈奠

大阪府藤井寺市の道明寺天満宮では、孔子の祭り――釈奠（せきてん）が、今なお行われている。

もともと「奠」は供え物、「釈」は置くことをいい、「釈奠」で供物を置いて祭ることを意味したが、のち孔子の祭りだけを指すようになった。中国では紀元前からすでに実施され、日本でも平安時代の大学寮、江戸時代の林羅山の聖堂や藩校において広く行われていたが、幕末・維新期に至って多くが廃絶した。

しかし、儒学を重んじる南岳は明治６年（1873）、旧高松藩藩校の講道館で奉祀されていた孔子像を香川県から譲り受け、明治21年（1888）、泊園書院で初めて釈奠を行った。この孔子像はもと栃木県の足利学校に伝えられたものという。

ついで明治36年（1903）、南岳は当時土師（はじ）神社と呼ばれていた道明寺天満宮に宮司の南坊城良興らの協力を得て孔子像を祀る大成殿を作り、同年３月30日、第１回釈奠をとり行なった。その後、釈奠は地元の「釈奠会」の人々の努力により絶えることなく続けられ、今年（平成28年）で113年目（第113回）を迎えた。

なお、大成殿の設計者は帝室技芸員の９代目伊藤平左衛門。帝室技芸員は当時の人間国宝に相当し、伊藤は寺社建築の設計監理で有名であった。この大成殿は現在に残る泊園関連の建築物としては唯一のものである。

道明寺天満宮 大成殿

孔子像（大成殿内）

正面扁額（南岳筆）

院主たちの墓

藤澤家の菩提寺は、大阪市天王寺区生玉町にある曹洞宗の寺院齢延寺（れいえんじ）である。墓域内には向かって右から「東畩藤澤先生墓」、「南岳藤澤先生墓」、「黄鵠藤澤先生墓」、黄鵠の子孫の「藤澤家之墓」の墓石が寄り添うように並んでいる。

墓域の少し離れたところには黄坡や桓夫、三崎麟之助（南岳三男）の墓もある。また齢延寺には東畩の父の閑翁（通称：喜兵衛）、母の清香（通称：加禰（かね））、妻の阿部貞、さらに南岳の妻も葬られている。

齢延寺の山門前には、東畩の没後五十年祭が挙行された時に建てられた「藤澤東畩先生墓所」の大きな標石が立てられていて印象深い。碑の背面には「大正二年四月　泊園門下生建之」と刻まれている。

東畩墓

南岳墓

黄鵠墓

黄坡墓

「藤澤東畩先生墓所」標石

泊園書院関連年表　寛政６年（1794）～平成28年（2016）

【江戸時代】	
寛政６年（1794）	東畩、四国高松藩の香川郡安原村（現：高松市塩江町安原下中村地区）の農家に生まれる。
享和２年（1802）	東畩、９歳で横堰（よこい）村（現：高松市香南町 横井）の中山城山に師事する。
文化13年（1816）	東畩、長崎に遊学し唐音（中国語）を学ぶ。
文政２年（1819）	東畩、長崎より帰り、高松福田町に私塾「守泊庵」を開く。
〃　８年（1825）	東畩、大阪に出て淡路町御霊筋西（淡路町５丁目）に泊園塾を開く。
天保８年（1837）	大阪で大塩平八郎の乱起こる。中山城山、高松で死去。
〃　９年（1838）	泊園塾、瓦町２丁目に移る。東西より従学する者多し。緒方洪庵、大阪に適塾を開く。
〃　13年（1842）	東畩の長子恒（つね）（通称恒太郎、号は南岳）、生まれる。
嘉永５年（1852）	高松藩、東畩を士分に列し、藩儒として俸禄を与える。ただし、そのまま大阪在住を認める。
文久３年（1863）	東畩、大阪城代の「御城入儒者」に選ばれる。
元治元年（1864）	東畩、将軍家茂に京都二条城で謁見。12月16日死去、享年71。大阪生玉の齢延寺に葬られる。
慶応元年（1865）	南岳24歳、家督を継いで高松藩の藩儒となり、泊園塾を主宰する。
〃　４年（1868）	鳥羽・伏見の戦い。南岳、高松に帰り、藩の方針を佐幕から勤王へと転換させ藩滅亡の危機を救う。藩主頼聡（よりとし）、その功績を賞して南岳の号を賜う。大阪の泊園塾、いったん閉じられる。
【明治時代】	
明治２年（1869）	南岳、高松藩政に参与し、藩校「講道館」の督学となる。この年、大阪の懐徳堂閉じられる。
〃　３年（1870）	南岳、藩主頼聡の命により高松の私宅（東香川郡中ノ村天神前）に泊園塾を開く。
〃　６年（1873）	南岳、大阪にもどり、船場唐物町八百屋町南へ入る西側（唐物町２丁目）に泊園書院を再興する。時に32歳。この頃、牧野仙を娶る。仙は高松藩儒の牧野黙庵の子。
〃　７年（1874）	南岳の長男、元造（号は黄鵠）生まれる。
〃　９年（1876）	南岳の次男、章次郎（号は黄坡）生まれる。書院、大阪淡路町１丁目東北角に移転。この頃、入門者激増する。
〃　21年（1888）	石濱純太郎生まれる。
〃　22年（1889）	16歳の黄鵠、上京し神田の共立学校に入学する。
〃　25年（1892）	17歳の黄坡、岡山の閑谷学校に入学、以後２年ほど通学する。
〃　26年（1893）	南岳、帝国大学教授島田篁村から文科大学漢学科講座教授就任を要請されるが、固辞する。
〃　28年（1895）	黄坡、東京高等師範学校・国語漢文専修科に第１期生として入学。
〃　34年（1901）	黄鵠、清国に留学、南京の東文学堂で中国語を学ぶ。
〃　35年（1902）	南岳、香川県安原村に帰郷し東畩の「頌徳碑」除幕式に出席する。この年、南岳は61歳で引退し、黄鵠が代わって書院の院主となる。石濱の姉カツ、黄坡に嫁す。
〃　36年（1903）	南岳、土師神社（現：大阪府藤井寺市道明寺天満宮）で初めて釈奠を挙行する。
〃　37年（1904）	黄坡の長男桓夫、生まれる。黄坡、翌年まで日露戦争に従軍し、戦後、功五級金鵄勲章を受ける。
〃　40年（1907）	黄坡、国漢教師として岸和田中学につとめる。書院、東区東平野町５丁目189番地（現：天王寺区東平２丁目）に移る。
〃　41年（1908）	黄鵠、第10回衆議院総選挙で衆議院議員（政党無所属）に当選する。石濱、東京帝国大学文科大学支那文学科に入学、日本漢文学の岡田正之に学ぶ。
〃　44年（1911）	黄鵠、南北朝正閏問題に関して衆議院本会議で演説し、その場で衆議院議員を辞職する。この年、南区竹屋町９番地（現：中央区島之内１丁目）に書院の分院を置く。黄坡、岸和田中学を退職してこれを主宰する。分院の建物はもと私立小学校で修斉学校といった。石濱、東京帝国大学を卒業。
〃　45年（1912）	通天閣、大阪新世界の遊園地「ルナパーク」に建設される。「通天閣」の命名は南岳による。

【大正時代】	
大正２年（1913）	東畝先生五十年祭を齢延寺で挙行、「藤澤東畝先生墓所」の石碑、山門前に立てられる。
大正５年（1916）	懐徳堂、東区豊後町（現：中央区本町橋）に重建される。
〃　９年（1920）	２月２日、南岳死去。享年79。齢延寺に葬られる。５月、石濱、泊園書院学会を設立する。南岳亡きあと黄鵠は引退し、書院経営は黄坡が引き継ぐ。これにより竹屋町の分院が本院となる。
〃　11年（1922）	石濱、大阪外国語学校蒙古語部に選科委託生として入学し、モンゴル語を学ぶ。関西大学、大学令により大学（旧制）として認可され、黄坡、予科の講師となる。
〃　13年（1924）	関西大学、福島に専門部文学科を設ける。黄坡、その講師として専門部の中心的存在となる。９月20日、黄鵠死去、享年51。齢延寺に葬られる。
〃　15年（1926）	石濱、関西大学専門部講師となる。
【昭和時代】	
昭和２年（1927）	石濱と黄坡、新聞『泊園』を創刊。以後、昭和18年まで刊行する。
〃　４年（1929）	黄坡、関西大学専門部文学科教授となる。石濱、関西大学法文学部文学科講師となる。
〃　９年（1934）	６月、内藤湖南死去。この年、黄坡、関西吟詩同好会を作って会長となり「会歌」を作る。
〃　13年（1938）	黄坡、関西大学教授を定年退職（満60歳）。のち昭和23年まで非常勤講師をつとめる。
〃　20年（1945）	６月７日、書院、空襲により焼失。ただし蔵書は書院内の土蔵に保護収納されていて焼失を免れる。まもなく藤井寺市道明寺天満宮に移され、事なきを得た。８月15日、終戦。
〃　23年（1948）	黄坡、関西大学初めての名誉教授となる。12月13日、黄坡死去、享年73。齢延寺に葬られる。黄坡の死去により泊園書院は幕を閉じる。 ＊
〃　24年（1949）	関西大学文学部に史学科を開設、石濱その教授となる。
〃　26年（1951）	３月、泊園書院の蔵書、藤澤桓夫により関西大学に「泊園文庫」として一括寄贈される。ついで文学部に東洋文学科が開設される。専任教員は石濱（史学科と兼任）ら３名。また関西大学東西学術研究所が泊園文庫の整理などを目的に設立され、石濱、その所長代行兼第一部長となる。
〃　31年（1956）	石濱、東西学術研究所所長となる（昭和40年３月まで）。
〃　32年（1957）	石濱、関西大学より文学博士の学位を受ける。関西大学における最初の文学博士授与。
〃　33年（1958）	石濱、関西大学を定年退職し（満70歳）、名誉教授となる。
〃　36年（1961）	泊園記念会が設立され、第１回泊園記念講座を中之島の朝日新聞大阪本社講堂で開催。
〃　38年（1963）	香川県塩江町で東畝百年祭が行なわれ、東畝顕彰会、「庭闌春色新　藤澤甫」の記念碑を塩江中学校校庭に建てる。藤澤桓夫、同地の東畝「頌徳碑」の前に「藤澤東畝頌徳之碑」の標石を建てる。
〃　43年（1968）	２月11日、石濱死去、享年79。大阪市北区東寺町宝珠院の石濱家墓所に葬られる。
〃　45年（1970）	石濱の蔵書四万二千余冊、「石濱文庫」として大阪外国語大学（現：大阪大学）に寄贈される。
【平成時期】	
平成元年（1989）	６月12日、藤澤桓夫死去。齢延寺に葬られる。その蔵書三千余点、まもなく大阪府立中之島図書館に「藤沢文庫」として寄贈される。
〃　２年（1900）	関西大学で「泊園記念会設立30周年・泊園記念講座開設第30回記念行事」を開催。
〃　22年（2010）	10月、泊園記念会創立50周年記念国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」を関西大学で開催。あわせて特別記念展示を催す。旧竹屋町（島之内１丁目、現：澤田氏宅）にあった藤澤桓夫題字の「泊園書院址」碑を関西大学以文館北側に移置する。
〃　25年（2013）	11月、高松市歴史資料館で「藤澤東畝展～没後百五十年記念～」開かれる。
〃　27年（2015）	３月、藤澤桓夫の没後25年、生誕110年を記念し住吉区上住吉の旧居跡地に「藤澤桓夫邸「西華山房」跡」の顕彰碑建てられる。
〃　28年（2016）	８月、関西大学創立130周年記念事業の一環として、高松市の東畝「頌徳碑」を旧安原小学校内に移す。

泊園

泊園記念会へのお誘い

泊園記念会は泊園書院のすぐれた伝統を現代に継承、発展させようという趣旨のもとに、昭和36年（1961）6月に設立されました。ときあたかも書院の蔵書が「泊園文庫」として関西大学に寄贈され、東西学術研究所が創立されて十周年という節目の年にあたっていました。以後、記念会は市民講座として「泊園記念講座」を毎年開催し、平成27年（2015）に第55回を迎えました。雑誌『泊園』もすでに第55号を刊行しています。

会員には『泊園』を毎年1冊お送りするとともに、泊園記念講座その他さまざまな行事の連絡、出版物の優待などをいたします。この機会にぜひ泊園記念会にご入会ください。

年会費　3,000円
事務局　〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35
　　関西大学東西学術研究所内　泊園記念会
電　話　06-6368-0653　FAX 06-6339-7721
Eメール　hakuen@ml.kandai.jp
振　替　00940-2-9398

泊園書院―なにわの学問所・関西大学のもう一つの源流
平成28年（2016）8月19日発行
編集者　吾妻重二
発行者　関西大学泊園記念会
〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35
関西大学東西学術研究所内
印　刷　株式会社　遊文舎
〒532-0012　大阪府淀川区木川東4-7-31
（非売品）